瑞光寺所蔵古典籍資料調査について

附　同寺所蔵『亡羊子東遊記』――紹介と翻刻――

村木敬子

一、元政上人と瑞光寺

京都市伏見区の深草山瑞光寺は、江戸時代前期の文人僧、元政上人（日政・一六二三～一六六八）を開基とする日蓮宗の寺院である。寛文期の詩豪として石川丈山と並び称される元政は、『草山集』『元元唱和集』『聖凡唱和』に代表される詩文集をはじめ、『釈氏二十四孝』『本朝法華伝』『扶桑隠逸伝』等の評伝、『身延道の記』『温泉遊草』などの紀行文、『草山和歌集』に結実を見た和歌、門弟に修業の心構えを記した『草山要路』といった、さまざまな分野に亘る著作をものし、また『元政版法華経』を刊行するなど、ひたむきな仏道修行と教学研究の傍ら、旺盛な創作活動を営んでいる。そしてその著作の多くが、すでに元政の存生中から書肆・村上勘兵衛の手で世に送り出され、以来、現代に至るまで江湖に愛好されていることは周知の通りである。

その清廉な生涯についてもここに贅語を要さないが、略述すれば京の武家石井家で篤信の日蓮宗徒を父母に、元和九年、五男二女の末子として生を受けた。兄弟にはのちに彦根藩主井伊直澄の生母となる姉、藩士の兄らがおり、自らも十三歳で彦根藩に出仕するが、遁世の望み抑えがたく、生来の病弱を理由に二十六歳で致仕、妙顕寺日豊上人を師として出家した。その後、日豊が権大僧都に任ぜられ池上本門寺に赴くのを期に、数名の弟子とともに妙顕寺を出、深草の地を得て「称心庵」を結び隠棲する。明暦元年、上人三十三歳のことであった。数年のうちに堂舎が建立され「瑞光寺」となり寺観は整うが、出家の時の志を違えることなく、遷化までの十三年という長からぬ月日を、宿痾と闘いつつこの地でひたすら勤行と執筆に没頭し、また母への孝養を尽くした。母妙寿が八十七歳で没した翌年の寛文八年二月十八日、四十六年の生涯を閉じる。元政のともした法灯は草山二世慧明日燈、三世慈観日静、四世慈航日津と渡され、竹三竿の墓とともに今日へと受け継がれている。

ところで貴重な蔵書や元政所用の什器が瑞光寺に伝えられていることは、従前から知られており、寺宝の『大般若経巻第二百四十六』（長屋王願経一帖・和銅五年写）が大正十五年に、『南蛮人蒔絵交椅』（一脚・

桃山時代）が昭和三十一年に国の重要文化財に指定されている。また古活字版については宗政五十緒氏、土井順一氏により調査が行われ、「京都深草瑞光寺蔵古活字本書誌（共同研究）」（宗政五十緒・土井順一編　龍谷大学仏教文化研究所紀要　通号10　一九七一年六月　及び同誌通号11　一九七二年六月）に、三二点の詳細な書誌と影印が報告されている。知られるとおり、そのほかにも『かながき法華経』『俳諧女歌仙』など、いくつかの資料は研究書で言及されている。

寺宝の一般公開も行われており、毎年三月十八日の元政忌には、本堂脇の称心庵において、元政自筆資料を中心に書画、仏具、茶道具など百点ほどが展観されるが、さらに近年、寺外で元政展が開かれ、遺愛の品々が出陳される機会があった。その一つは「深草元政―彦根ゆかりの詩僧―」展（彦根城博物館　一九九七年九月）である。同展覧会には元政上人の坐像をはじめ、袈裟、如意、払子、木机、茶碗など、元政所用の遺品を含む瑞光寺の寺宝五十数点が出品され、そのうち元政自筆の漢詩や書状、陳元贅自筆漢詩など四十点ほどの典籍が紹介された。もう一つは「身延山五重塔復元完成記念展　深草元政上人のご生涯―天高けれども孝よりも高からず―」（身延山久遠寺　二〇〇八年）で、同展は「元政上人身延来山三百五十年」の記念の意味も込められたものであった。前記彦根の展示と同様、元政の遺品や自筆本はもちろん、父母の肖像画や木像、歴代の付嘱本尊、二代慧明の肖像等が出品され、また、このときは瑞光寺だけでなく久遠寺、平塚隆盛寺所蔵の典籍も併せて展示された。

しかしながら、右に挙げたものは瑞光寺に残された蔵書のごく一部であり、これまでその全体像は知られていなかったといえるであろう。国文学研究資料館は、草山第十五世川口智康師のご理解のもと、瑞光寺所蔵古典籍の悉皆調査を行っている。平成七年度・八年度の二回の予備調査を経て、平成九年度より本調査が始められた。主要な調査員は岡雅彦、岡崎久司、中前正志、原雅子の各氏および筆者であるが、長期にわたる調査のため、そのほかにも多くの方のご協力を得た。毎年度八月と二月のほぼ二回、それぞれ五日間前後の調査を行い、調査回数はすでに三十回近くに上り、蔵書のほぼ全容が明らかになりつつある。元政自筆本を中心とした調査は今後も継続されることになろうが、ひとまずここにこれまでの調査の概要を報告し、資料の紹介をしておきたい。

二、収蔵状況と資料

現在、蔵書は内側の要所を鉄骨で補強した二階建ての土蔵に収納されている。この土蔵については、身延山三十六世日潮上人の『本化別頭仏祖統紀　巻二十二』（享保十六年成立）「艸山第二代慧明老和尚伝」に「元禄三年庚午齢半百造二一切経蔵ヲ一自荷レ土ヲ曳レ石ヲ蓋酬ト二先師ノ徳ニ一也」の記事が認められ、また土蔵の一階壁面の棚には、元禄四年の慧明の刷識語を裏見返しに添付した、主に鉄眼版を中心とする版経が多数収納されていることから、元禄期に慧明の熱意によって建立された一切経蔵かと推察される。ちなみに『本化別頭仏祖統紀』の著者日潮は、同書

「艸山第三代慈観和尚伝」の中で「潮八歳受二之恩沢一甚深」と記しており、瑞光寺の記事を書くにあたって自らの見聞をもとにした可能性が高く、瑞光寺には日潮の筆跡もいくつか残されている。さらに同寺の現存資料の中に「深草元政上人草庵経庫額」の注記のある「法界蔵」三文字を記した軸があり、これが件の土蔵の名称かとも考えられる。

調査は庫内の収納場所と形態別に資料を左記の七つに分類し、蔵書一点ずつに分類ごとの通し番号を記した短冊を挟み込みつつ、調査カードを作成し整理する、という手順で進めている。二〇一一年度までの調査で採録した総タイトル数は約四七〇〇。ただし、瑞光寺のいわゆる寺院文書についてはこのたびの調査対象とはしていない。以下、その分類ごとの蔵書の特徴を述べる。

① A番号　約九十点

土蔵一階に安置された、江戸前期のものと思われる二つの大きな長持に収納する、元政自筆本を中心とした多数の典籍のうち、冊子および巻子本の形態をとるもの。版本はわずかに五点で、あとは全て写本である。蒔絵の大型の文箱が二箱あり、写本の一部はそこにまとめて納められている。元政自筆本は『草山集』『草山和歌集』など自著草稿本、『源氏言葉』『建礼門院右京大夫集』『伊勢千句』等、美しい料紙に書写した文学作品、『耳塵』『雑々抄』のように禅籍や抄物から抜き書きした雑纂、『法華経寿量品』『受戒作法』『施食通覧』など教学研究を示す写本等、多種多様でいずれも極めて貴重である。

就中最も重要なものは、いうまでもなく元政上人自筆の『草山集』草稿五冊であろう。江戸前期に出版された代表的な詩文集の、著者草稿本が残されていることは驚くべきことで、版本との詳細な比較が今後の近世漢詩研究に齎すものは多大であると思量される。

このA番号中には、書き入れや識語から元政の妙顕寺時代の学問が知られるものが多い。例えば自筆写本『八月十五夜歌合』には「這一帖以教学之余力／惣々写之雖加一校猶定／有落字等後来可遂重勘者也／慶安二年孟春念二　桑門元政」の奥書があり、紙背には近親者同士のやりとりと思しい消息が見いだされる。また、慶安元年五月の書写奥書を有す元政自筆『二十一代集摂関系図』や、慶安三年に師日豊から受持した『古文孝経』等にも元政二十代後半の勉学のあとが刻まれている。文反古を用いた写本は少なからず混在し、『和歌十躰』紙背には元政の甥、井伊亀之介直澄が、元政の父石井九郎兵衛に宛てたと思しい書簡がある。

② B番号　約三二〇〇点

土蔵二階の四方に廻らされた書棚に収蔵される資料群。写本はその四分の一ほどと少ないが『法海波瀾』『文海波瀾』など元政自著自筆本も散見され、特に元政生涯の友となり、詩作に深い影響を及ぼした明人、陳元贇から送られた書簡を、上人自らが書き留めた『芝山尺牘』などが貴重であろう。そのほかの写本では『祖書』『御書』等、数点の室町時代の仏書と、近世中期から明治時代にかけての仏書や聞き書きの類がその大部を占める。ただ江戸中期、とりわけ元文頃の瑞光寺には、元政の遺徳を慕い平楽庵に起居して『峨眉集』を執筆した観如日深のように、寺外からも学僧が出入りしており、そうした人々による様々な種類の写

本が残されている。その一例を本稿の末に示すが、写本の中から今後も稀本が見いだされる可能性はあるだろう。

B番号では、特に江戸初期から中期にかけての仏書の版本、および漢籍の和刻本に充実した堆積を見る。近世初期の出版に日蓮宗の寺院が果たした役割を考えれば、宗門の寺院に当時の天台・法華関係の出版物が数多く蔵されるのは自然であるけれども、瑞光寺には開山の性格を反映して、それにとどまらない広い分野の古活字版や整版の有刊記本が豊富に存在し、初期古活字本では『法華経伝記』（慶長五年刊　要法寺版）『伊勢物語』（慶長十三年刊）、『南浦文集』（寛永二年刊）等、枚挙に暇がなく、その多くは『江戸時代初期出版年表　天正十九年～明暦四年』（勉誠出版　二〇一一年）に採録されている。

古活字本の中でも特筆すべきは、宗存版が七十一タイトル一二〇帖と纏まって収蔵されていることである。同寺の宗存版は海老茶色の表紙を持つ折帖である。特に扉絵のある『仏説寿生経』は新出の一点として注目される。元政はおそらく宗存版によって、ある程度一切経を整えようとしていたと思量される。これらの宗存版については詳しい報告書がある（岡雅彦氏「瑞光寺蔵宗存版について」『国学院大学紀要四十五号　二〇〇七年』）。

江戸前期刊本のうち、元政の手沢本には夥しい朱筆や墨書の書き入れが見られる。例えば江戸前期刊本『立正安国論』には「於洛陽立本寺遥師（干時隠逸）講談之以数本校合焉／他日猶依正本可加斧介身／慶安元年（戊子）孟冬念五／沙門元政日峯」の、同様に江戸前期刊『御書目録』には「於洛下立本精舎日揺上人下帷之節以身延／正本一転之書令校合焉／慶安元暦（戊子）十一月廿五日　元政日峯」の識語が認められる。

五山版も二点のみではあるが確認される。その一の『天台四教義』一冊は応永二十六年版の後印本。一丁ごとに料紙を挟み込み、夥しい注が施されている。巻末には大永五年の如寄子なる人物の識語と「文明十五年孟冬上澣日於竜嶋真乗院南寮五師鈔中撮其大要潤色云々　紙衣道人暮齢五十五」の元の識語があり、如寄子が華屋宗厳の書入れをそのまま移写したものと知られる。巻頭に「両足院」の扁額型朱印が捺され、建仁寺両足院旧蔵。該本には元政の所蔵印は見られず「城州紀伊郡艸山瑞光寺」の朱印があるのみで、後代に収蔵されたものと思われる。五山版のもう一点は応永二十七年版『金剛般若波羅密経注解』（南禅寺版）。「草山瑞光蘭若」「元政」の印があり、元政の手沢本である。

そのほか、明版が比較的多く混在し、刊年の古いものでは『大広益会玉篇』（永楽二十二年刊）が挙げられる。同書は端本ではあるが、「守仙」の白文朱方印が認められ、東福寺彭叔守仙の旧蔵書。元政の書き入れも多数見られる。ほかには『陶靖節集』（嘉靖二十七年刊）『鼎鋟崇文閣彙纂士氏拠用分類学府全編』（万暦元年刊）『春秋左伝節文』（万暦五年刊）等、いずれも元政が参照したものであろう。

いうまでもなくここには二代以降の歴代住持の自筆本、手沢本も多く、特に二世慧明、四世慈航日津、八世寿考日祐、十二世台巌日憲等の印記のある蔵書が目立つ。また、先述の『御書』『祖書』等の室町写本七点には、五世知量日充による補修記が見られる。

③　C番号　約一七〇点

A番号と同じく、一階の長持ち二櫃に納められる資料のうち、主に掛軸の形態をとるものを中心とする。元政自筆の貴重書が三分の一ほどで、軸装の漢詩文では『琵琶詩』『琶湖八景詩』『霊簿序』『春初遊谷口詩』『竹之詩』『山伏詩』『宜翁父哀詩』等、重要な作が挙げられる。『琵湖八景詩』は推敲の跡を留めた、もと冊子本の草稿を軸装に仕立てたものである。巻子本では、藍色の吹き染めで草花文を表した大型の料紙に、ゆったりとした大振りの草書で記された『遊醍醐寺詩并引』が注目される。首尾完存し、巻末に「丙午之穐八月十八日／燈下走筆／霞谷山人」の奥書と「泰堂」「元政」の朱印があり、寛文六年、上人四十四歳の気魄の籠る充実した作品。これらの資料は『草山集』所収の漢詩の原本と目され、自筆稿本や版本と比較した研究が俟たれる。

和歌では、「寄秋月恋」「野草花歌」「辞世和歌」等、散文では『草山日記』『有馬温泉遊』など、いずれも断簡の軸装である。書簡は母妙寿宛、師日豊宛、慧明宛、羽倉主膳信詮（荷田春満の父）宛などがあるが、特筆すべきは上人の陳元贅宛尺牘数点、『永訣之七絶』など元贅の漢詩および元政宛書簡、上人と元贅の墨痕を貼りあわせて一軸にしたものなどである。これらは先に触れた『芝山尺牘』と合わせ、両者の交遊や『元元唱和集』成立の過程が知られる重要な資料群であることは言うまでもない。

④　上C番号　約二二〇点

右記C番号に準ずる軸類。二階にあるやや小型の櫃に収められる。上人自筆資料は十数点に留まるが、詩稿、短冊、首題、『片岡正次伝』（一軸）などを含む。また、『元政庵古図』は淡彩で描かれ、上人自筆の書入れがあり、絵も自筆と思料される。瑞光寺創建前の深草の地形が忍ばれる希少な古地図である。この櫃には草山三世以降の首題や伝日蓮の首題、経巻のほか、近世絵画が多く、草山三世日静、四世日津、六世日禅、七世日善、八世日祐、九世善和、十世日種、十一世日摂、十二世日憲の肖像画、塩川文麟筆『元政幽棲之図』、伝狩野安信筆『八景之図』等が納められている。

⑤　D番号　約一二〇点

二階にある、上Cとは別の櫃に収められる軸物類。歴代の本尊が多いが、漢詩、和歌懐紙など数点の元政自筆写本を含む。また万治元年二月三日に、池上の日豊上人が元政に宛てた書簡には、元政の両親を気遣う言葉にはじまり、高槻の医師佐野十郎兵衛から痛風の薬が届いたこと、元政の「妙顕寺代々伝記」（『龍華歴代師承伝』か）が板行されること、江戸の大火のことなど、師弟間の深い交わりが伺える記述が見え興味深い。

⑥　K番号　約一三〇点

一階壁面の書棚に収納される経典類。近世以降の法華経の写本、版本が主体であり、さらに明版や室町末頃の折帖の紺紙金泥写経も見られる。版本のうち槇尾平等心王院版『梵網経廬舎那仏説菩薩心地経』（寛永十八年刊）、同じく平等心王院版『菩薩戒羯磨文』（承応元年刊）など数点は、雲母を撒いた厚様褚紙を用いた良本である。

⑦　K大番号　約七六〇点

右と同様に一階壁面に配置された経典類。既述のごとく、瑞光寺二代慧明日燈が元禄期に納めた刷経。新刷ではなく既刊の鉄眼版を核に、寛永から元禄までに刊行されていたさまざまな版経をもって一切経を備えようとしたと見られる。裏見返しに「開山和尚勧化四輩並損衣貲請贖／大蔵法宝以安之艸山瑞光教寺必願憑此／修勲若存若没三障霜消六根雪浄福寿／併増智願円成　雯冀随喜見聞均人薩／波若海者　岩元禄四年季秋日　見住　慧明燈敬識」の刷識語が添付される。その他、江戸前期の仏書二一〇点余を数え、元政手沢本もわずかながら混在する。

以上、瑞光寺所蔵の古典籍について祖述したが、最後に蔵書印について一言したい。すでに知られているように、同寺には元政および歴代が使用していた印がそのまま保存されており、先述した彦根城博物館の展覧会の図録にその一部の写真と印影が掲載されている。これまで見た限りでは元政所用の「泰堂」「霞谷山人」「称心庵」などの大型印は、自ら作品として意識していた漢詩などの完成作に、落款として捺されたもののようであり、蔵書印としては専ら「草山瑞光蘭若」（印稿は元政自筆）と小型の「元政」の二顆を使用している。現状から推して恐らく二代慧明日燈も、先師の没後しばらくは「草山瑞光蘭若」印を用いていたが、いつからか「城州紀伊郡草山瑞光寺」印を、さらに後代の住持は「草山瑞光蔵書之印」の印を使用していると思われる。それらの詳細な調査と、押印された資料との同定作業等は今後の課題の一である。

結び

右に見たように瑞光寺に現存する古典籍は、近世前期の文化人とその人を取り巻く文化に、時空を超えて分け入ることのできる、まことに希有な集積である。特に、自筆本のみならず個人が著作のため参照した手沢本が、ほぼ散逸することなく大量に残されているということは、極めて幸いなことであり、同時代には類を見ないものであろう。繰り返しになるが、元政や陳元贅の自筆本類がこれからの近世文学研究に大きく裨益することは疑いなく、江戸初期出版文化を考察する上でも、瑞光寺の蔵書は非常に重要な資料群である。惜しむらくは、寺宝の中には経年のため、虫損など必ずしも良好な保存状態にあるとはいえないものもあり、この貴重な文化財を後世に守り伝える適切な方法が求められよう。

瑞光寺所蔵『亡羊子東遊記』—解説と翻刻—

はじめに

瑞光寺の蔵書に、『亡羊子東遊記』と題された江戸中期の写本一冊がある。この本は内容から、江戸初期の儒者で茶人としても知られる三宅亡羊（寄斎・天正八～慶安二）が著した紀行文の写しであると考えられる。亡羊の経歴に関する大方の知見は、久しく『先哲叢談後篇』（文

政十三年刊）記載の範囲に留まっていたけれども、近年、三宅家遠孫のご架蔵資料の中から、亡羊自筆の『覚（遺言）』を含むいくつかの資料が見出され、飛躍的に多くの新知見が齎された。[1] それによって亡羊の経歴や交遊関係、儒者としての気骨などが知れたが、それでも我々がこの人物の像をなかなか結ぶことができないのは、偏に著作が全く知られないことに起因する。『寄斎文集』があるとされつつもその存在は未詳、残されたものとして右記の遺言に相当する『覚』のほか、漢詩の断簡や肖像画に賦された賛、書簡など、断片的なものしか見出されてこなかった。[2] また東北大学図書館所蔵の写本『小子夜話』は、『史記』『世説新語』『勧学文』『帝鑑図説』など、七十余点もの漢籍からの引用を集めた、乾坤二冊からなる講義用テキストのようなものである。[3] 巻頭にある寛永十九年の亡羊の序から、月に三回、五の付く日に老若を問わず有志が亡羊のもとに集まり、古典の輪読会が催されていたことなども知れ、注意を引かれる書ではあるけれども、あくまでも亡羊の「集」であり、純粋な創作とは見做しがたい。

この人の事跡に関することで、文学に関心を寄せる人々の記憶に刻まれているものは、僅かに慶長十八年の古活字版の、いわゆる『烏丸本徒然草』の刊行くらいであろう。この時期次々と刊行された『徒然草』の中で、本書が他書と一線を画するところは、すでに指摘されるように本文に濁点と句点が付されたことにあり、さらにそれを古活字という、そうした記号を併記しにくい媒体を使って為したところに人は強く印象づけられる。亡羊は己が『徒然草』の解釈に自信があったればこそ、自ら版下を書いて烏丸光広に校訂を依頼し、あの独特な書体を梓に上せたのであろう。「解釈」と「創作」とは得てして両立しがたいものではあるが、亡羊の古典解釈に対するこのような意欲と自負心とを見るとき、何人もその「創作」に対する興味を禁じ得ないのではなかろうか。

そのような中、ここに掲出する『亡羊子東遊記』は、亡羊没後の写本とはいえ、肉声を留めた纏まった著作として希有な存在である。そこには全篇諧謔に満ちた狂詩がちりばめられ、文人亡羊の面目躍如たるものがある。また文中に実名で登場する人々は、門人筆録の『履歴』には「入魂」の士として列記されるが、本書では亡羊自身の心情が狂詩に託して赤裸々に吐露され、各人との心的な疎密の度合いが測れるのも興味深い。

「亡羊子東遊記」について

該本は袋綴の一冊本。原装。大きさ二〇・八×一四・八糎。青色表紙の左肩に貼付された淡黄色の外題簽に「亡羊子東遊記」と、本文同筆で墨書される。内題も外題と同文。墨付き三三丁。毎半葉七行十四字。本文は漢字文。カタカナによる付訓と朱点、朱引きなどの書き入れがあり、いずれも本文同筆である。落丁は無いものの虫損が甚だしく、判読困難な箇所のあるのが惜しまれる。見返しに「城州紀伊郡／草山瑞光寺」の長方朱印を捺す。

巻末に「元文丁／巳年晩冬十九日写畢」の書写奥書と、同じ「元文丁

巳晩冬」に「東武僧 普照」が「霞谷偏室」で書写した由を記す半葉六行十二字の後題一丁半分がある。本文、奥書、後題は全て普照によるものと判断される。この人物は未勘であるが、瑞光寺には同筆の写本が数点蔵され、例えば『釈菜次第』には「霞谷瑞光練芳之旧木蠹蝕不少筆蹟粗悪魯／魚亦夥矣暇日繕写以蔵于文庫耆／元文三年戊午春二月七日東都僧月山書」の、『大学会御禊行事記』には、文中に「元文四己未歳三月十九日援筆於霞谷静室」、巻末に「元文四年己未秋八月／東海僧普照子月山援筆於北岩蔵草庵」の書写奥書がみとめられる。また建仁寺両足院所蔵の『義堂和尚日工集抜萃 附南禅寺義堂信禅師伝』の書写奥書[4]にも「右日工集抜粋一冊以艸山元政上人所抄出／本写畢或曰義堂日工集有四十八巻又有／日用工夫略集四冊／元文五年庚申六月／東都僧普照子月山援筆於深艸山下草庵」とあり、これも同一人と断定できよう。「月山普照」は恐らく江戸の僧で、元文頃、瑞光寺や北岩蔵などに寄寓し書写に励んでいたとわかるが、稿者はそれ以上知るところを得ず、識者のご教示を請う。後題の一文でこの作品を一休宗純以来の狂詩の系譜に置き、儒者の狂詩の嚆矢と位置づけるあたり、洒脱な文体と相俟って機知に富んだ一廉の人物かと想像する。

底本と目される本は瑞光寺には見当たらず、他に亡羊関連の資料もない。亡羊と元政とは四十四も年の開きがあり、両者に直接の親交があったとは思われないけれども、亡羊が江戸に「東遊」していたこの時期、弱冠十七歳の少年元政も江戸で彦根藩主井伊直孝に仕えていた。さらに穿って、文中に登場する、亡羊に扇への染筆を請い風のように走り去る少年を元政としたい大きな誘惑もあるが、実際は元政が漢詩や紀行文への興味から手元に置いていたといったところであろう。あるいは亡羊は身延山二十一世孝順日乾の取り持ちで頂妙寺にて『老子経』の講義を行ったことがあり（『履歴』）、そのことが関係しているとも思料される。もっとも、元文二年本の底本が元政旧蔵書ではなく、瑞光寺二世以降の住持が蒐蔵した可能性も無いわけではないが、同寺の蔵書群を通覧する限り、該本はそれらの人々の蔵書とは異なる性格を持つ。底本はやはり元政その人の蒐書であったと現段階では考える。

内容は亡羊六十歳、寛永十六年の五月八日に京を発ち、翌十七年九月十日頃江戸の逗留先を辞するまでの紀行である。以下ほぼ編年体をもって構成される『履歴』の寛永十六・十七年の項の記載と対照させながら見ていく。

冒頭に「帰レ家未レ日再東遊」とあるにより、このころ亡羊は頻繁に諸国歴訪の旅に出ていたと知れる。出立の日の様子を「寛永之十六年夏五月之八日、時日破二夢於子一、出二家於寅九一」と極めて具体的に記す。『履歴』の「六十歳　寛永十六年己卯」の條には「一、五月六日、江戸御下向」とあるから、その間二日の隔たりあるも、両書の記載はほぼ一致している。途次、多少の悪天候に見舞われながらも順調に歩を進め、新居関を十四日に通過、十七日に三島に至り、十九日には戸塚に到着する。ここにしばらく滞在したのか、江戸の地を踏むのが二十五日（本文では「廿五」としているが、次が廿二日の記事であるから「廿日」の誤りか）の正午、早速知友を尋ねて歓待を受けた。その後「伊州

太守藤堂主」の招きに応じてその傍らに居を移し、翌年の出立まで起居した。時の藩主は寛永七年に没した藤堂高虎の後嗣、高次である。

文中には実名で江戸初期の著名な人物が登場する。まず対馬の宗氏である。十月の望に「対州刺史宗氏」の屋敷を六、七人で訪れ舟を浮かべ、『後赤壁賦』になぞらえた詩を吟じて遊ぶ。宗家の当代は義成。宗家の江戸上屋敷は藤堂家の屋敷の北側に境を接していた。宗家訪問の一行の中の「保田氏」は伊賀出身の藤堂家家臣、保田采女であろう。

「佐久間大人」こと佐久間将監実勝は、『履歴』に「御入魂」と注記されるだけに、その親交の具体の幾つかが該本にも現れているけれども、実勝に対しては心中思うところがあった。亡羊は十七年二月の末、請われて実勝の山里を訪れ鄙びた武蔵野の風景を愛でる。『羅山詩集　巻九』「居所下」の「佐久間親衛校尉別野十景」や「自然境　佐久間将監別業」に再現されるごとく、そこは武蔵野の自然を生かした野趣溢れる造作が自慢とされていた。亡羊もその景観に目を驚かせつつも、風景描写には、特定の個人や茶道具を示唆するようないくつかの言葉を巧みに織り込んでいる。ここで同行の「佳人八木氏」に実勝の招聘に対する意思を問われ、意味深長な詩を詠ずる。この八木氏に関しては『履歴』にも、江戸逗留中の出来事として「一、矢木勘十郎殿へ御あひ候事。」の條があり、八木（矢木）氏は作事奉行八木守直と推定される。佐久間氏とはその後も往来がある。十七年八月一日、佐久間家から亡羊の仮寓に題詩を求めて一画巻が齎される。件の画巻は、巻頭に丹青の美しいみごとな山水画が描かれていたため、亡羊も一度は辞退したが、巻末に恵美酒・大黒・布袋・福禄寿の四睡図の戯画があり、そこへの着賛を後日請け負う。

異色の登場人物として「豆州走湯山賢懿法印」なる男色の僧がいる。この人物の請いにより亡羊は禅僧風の艶詩を作り、臨席した「浮屠を出て昨非を悔いる者」から「腐儒」と罵られるが、これなども禅から儒へという当時の世相を映しだす面白い一場面である。またこのことは『覚（遺言）』の中で、仏式の弔いを強く拒んだ文言とも呼応するけれども、『覚』での激しい口調がここには見られず、滑稽を装い亡羊が身を退けた形となっている。このように本書は小冊子とはいえ登場人物は賑やかな顔ぶれで、エピソードも多彩である。

『亡羊子東遊記』は寛永十七年九月十日以降に藤堂家の江戸藩邸を後にするところで終わっている。出立の正確な日取りは明かされていないが、『履歴』には「一、十月七日、江戸より御皈洛」とあり、行きは京、江戸間を二週間ほどで走破していることを考えると、中途で他所に立ち寄ったのであろうか。なお『履歴』にある江戸逗留中の出来事で、該本に記されているのは先の八木氏の一件のみで、次の二項目については記されていない。すなわち「一、江戸ニ於テ周防殿御引合せ候て、道春と御近付ニ御成候事」「一、金子百両、大学殿ヨリ被進候事」がそれである。板倉重宗、林道春については本書では全く触れられておらず、百両の意味も知る由がない。記載が無いのは、かえってそれらが江戸下向の目的の核心に近い故かとも思われるけれども、想像の域を出ない。寛永十七年は、家康の二十五回忌にあたり、諸侯は日光へ参詣した。本書で

は「五月上旬諸侯帰レ邑」とのみあるが、江戸に謂集した人々との折衝という大役が亡羊に課せられていたことは疑いない。しかし『烏丸本徒然草』の刊行からすでに三十年、若年の頃の新時代を予感させる高らかな音調はすでになく、本書が主題とする諧謔の裏には、通奏低音の如く一種の諦観と自嘲の乾いた笑いが響いている。

ともあれ激動期に京、江戸間を往還した江戸初期の多くの文人の狂詩、または紀行文の一として、興味の尽きない一書である。稿者は江戸初期文芸にはもとより不案内である上、幅広い漢文の素養に裏打ちされ、四書や唐詩、記紀の一節などを駆使した亡羊のパロディー、狂詩の破格や、その意とするところを到底汲み尽くすことを得ず、注も出典を示すに留まり不十分であるが、大方のご教示を賜ることを願いここに紹介する。

付記　本稿を為すにあたり翻刻のご許可を賜りました瑞光寺川口智康師、および貴重な資料の閲覧をお許しくださった山上尚男氏に深謝申し上げます。

『亡羊子東遊記』翻刻

凡例

一、本稿は京都市瑞光寺所蔵、「亡羊子東遊記」（元文二年写本）の翻刻である。用字は原則として通用の字体に改めた。

一、句読点は原文に施された、本文と同筆の朱筆に拠った。送り仮名、振り仮名も本文同筆の墨書に拠るが、一部私に補ったところがある。また、原本における誤記訂正や補記は訂正・補記後の姿に従った。さらに難読あるいは写し誤りかと思われるところは正した。

亡羊子東遊記[5]

白氏吟得曰、逢レ春不二遊楽一、但恐是痴人。[6]某甲日者雖レ在二傍国一可怜国一不レ知二帝宅花春一也一尚。以レ衣嫒染二紫陌之塵一、以レ履轉穿二紅阡之地一。帰レ家未レ日再東遊。惟寛永之十六年夏五月之八日、時日破二夢於子一一、出二家於寅九一。徒歴二丑三一者何乎。浮生軽二於葉一、[8]俶装[9]重二於石一。蓋身之不レ修、而業之拙也。茫然打出浜。誰人会坂山。志之所レ之如レ之。[10]

南海浮生借二一枝一[11]

独出二都門一誰会坂　瘦藤破笠思無辺[12]

鐘声遥聞寺三井　船戦高飛浦堅田

滋賀花園[13]皆易レ色　辛崎松葉薄籠レ烟

東遊終レ役疾来レ此　零落布衣吾錦旋

当辺是石山寺。彼日本紀局、筆[15]作六十帖一之地也。

難レ図紫式部思案　無レ類光源氏鬱陶

名与二石山一其共立　鑽弥堅矣仰弥高[16]

急雨跳レ珠、暴風転レ石。竹輿馬駝、入二艸津一而一宿。久哉嚙昔之夕、月難二于箕畢一。[17]那辺恰　近江二于洛一。旅懐何切。

雨入二艸津一聴異哉　旅窓洗尽絶二纖埃一

数声千面琵琶曲[18]　更引二起潯陽月一来

九日天陰。遅々出二艸津一。頃刻、後者高呼。顧而応レ之。一友子之策二羸驂一来也。欣然共入二醒井一而一宿。昔在日本武尊至二膽吹山一、而不レ知二復可レ行之路一、乃飲二其泉一而醒レ之。故号二其泉一曰二居醒泉一也云云。今之醒井是也。

自レ東自レ北所二人鐘一　居醒之泉起倒レ甕

沈湎[21]此宵何可レ厭　挹レ清酒レ面旧時容

十日日和好。過二磨針寝物語一、而入二濃州不破一。不破片県、聞唐[22]呼一百余之裔也。倦レ名不破関。破却無レ跡。

呼二関不破一有二何功一　夏草迎レ涼占二一叢一

荒得板廂今削レ迹　未レ秋此地只秋風

入二関原一而暫休息。及二日暮一而過二古戦場一。悲風吹レ面、寒毛卓立。[25]

来二古戦場一思二旧年一　東西争レ死此駢レ肩

鬼燐恰似二奇兵出一　認作二某辺一他所燃

方レ夜而自二栗崎一、発船以之二尾之熱田一。

岩松担レ月暮嵐烈　風葦招レ涼河水清

若至二京城一告レ無恙　舟東行矣岸西行

十一日日和好。午前入二熱田一而暫休息。祓詣二現人神之廟一。

熱田廟古徳高哉　貴賤拝趨茲卸レ笠

夏日民如言二趙盾一[26]　神威振二傅説霖一来[27]

入二参之池鯉鮒一而一宿。大雨。

十二日雨未レ霽。帰客行人、荷レ蓑荷レ笠。八橋之蜘手、[29]今也則亡。

八橋杜若所二人称一　動入二和歌一被二比興一

沢亦作レ田無二看処一　但看野水二三升

入レ赤坂一而一宿。

夕陽纔赤坂　凌レ雨寄二斯身一

誰去二吉田地一　遠之二荒井浜一
浮生嘆竟レ日　衰貌酔生レ春
好二人相対　不レ求今得レ仁(30)

十三日又大雨。至二吉田一而暫休息。路中有レ里。商女牽レ袂云。旅人旅人、見二此柏餅一。取而見レ之、其為レ物也、不レ凡。中薄紫而外清白。以二柏葉一裹レ之。里名二河。二河在二三河一者良有レ以。入二白須賀一而一宿。那辺漸遠江二于洛一。旅懐尤切。

十四日天陰。遅レ明而渡二荒井一。踰波趨レ浥、順風帆舶。須臾而著レ岸。舞坂已過、浜松蔭レ人。仍暫休息。郵亭(31)主勧レ酒而不レ休。歌云浜松音諷諷(32)。大小之天龍、水浅而易レ渡。至二見付一而雲消露晴。富士山始出。

富士高峯見付奇　人々坐打望二天涯一
日々征鞍裁レ山去　艱難嶮岨不二曾知一
入二袋江一而一宿。

十五日和好。越二懸川新坂一、而入二小夜中山一。予対二此山一者已三、遠者三十年、近者十年。于時哦二一詩一云、小夜中山似二夜明一。裹レ山雲露一時晴。豈謂年高又応レ越。西行(33)口號我東行。今日又対二此山一。無レ定哉。

小夜中山三踏レ之　東漂西泊水雲涯
不レ意前年又応レ越　又応レ越矣又無レ知
至二金谷一而暫休息。酔レ人秣レ馬、向二大井河一。傭二水夫十余輩一渡レ之。大難大難(34)。

舟以難レ浮大井河　橋其不レ得只斯河
怒涛巻レ雪瀬於変　是亦可レ言無定河(35)
金谷島田之水夫、日夜済レ人、以己渉レ世。河水大則喜レ之、憶得蓼虫好レ辛。過二駿之島田一、入二藤枝一而一宿。
乗レ涼愧我合レ甘閑　出レ洛更今之二暑間一
借二宿藤枝一身似レ鳥　若生二羽猟一一飛還

十六日日和好。瀬戸染飯、宇都山十団子(37)、又不レ凡。既而過二蔦之細道一。

宇都山越暗而細　細道分迷脚認レ痕
今人今亦昔男昔　不レ易蔦鶏冠木蕃

入二府中一而暫休息。毎レ見大者富士山。夫山跨二駿豆甲之三州一亘二数十里一而峯聳二天際一。至レ頂而有(38)平地之広、及二一里許一。中央窪下體如二炊甑一。甑中有二一大石之似二虎蹲一也。蒸気之自二甑底一、涌出者如二火烟一。所謂富士烟是也。有二亟池一。池辺多レ竹。山腰以上、無二樹木之復生一。山腰以下、有二小松之繁茂一。白沙成レ山、欲二攀登一則白沙流下。因不レ得レ達レ上。達レ上者、役居士耳。宿雪不レ知二春夏一。時五月月尽、在中将詠曰二時不レ知山一。六月十五日消者、其夜降者、万葉集之説也。外取二説於都良香一。而儘省以記レ之。有下仙簾之一貫珠、従二山峰一而落来者上。承和年中也。貞観十七年十一月五日、致レ祭之日、有二白衣之美女一、双舞山顛一也。又聞山之束脚下、有二一箇小山一者、本謂二之新山一、是延暦二十一年三月、雲霧晦冥弥レ旬也。晴後此山出。蓋神造也。今謂二之脚高山一。浅間大神

是山神也。名二富士一者、取二郡名一也。一友子問云、有レ詩乎。大哉富士又高哉。白雪翠雲相映堆。若成二八字一称レ山去、全是虚空紙一枚。所レ賦是十年前。(39) 士峯六月雪班々、拍レ手擡レ頭各解レ顔、四海九州無レ可レ比、高山不三敢問二何山一、又是三十年。別無二工夫一。責云企而及。企而及者斯已矣。

富士聳レ天離二世埃一　四時飛レ雪白皚々
此山本出二何人口一　盍吸二尽西江水一来(40)
至二清見関一又休息。
士峰凌レ夏雪埋レ山　和レ月今宵清見関
景作二防人一能駐レ客　忘レ吾立尽往兼レ還
当辺有二三穂松原一。
三穂松原緑四園　釣舟箇々日憑依
葉間傾レ笠吟相看　一片白雲天羽衣
岩頭植レ杖而眺望凝レ眸、娟々心目一者、如何吟得。
巨海茫々水拍レ天　懸レ空片帆往耶還
旅床幾度徒、焦レ思　添得辛鹽竈夕烟
入二油井一而一宿。
十七日和好。発路未レ遠、有二富士河一。是関八第一之急流。挾抄二三人、下二同舟一而棹レ之。危哉。
来往皆呼二富士河一　棹郎出レ力思無レ他
急流如レ箭魂如レ断　未レ恐身舟没二世波一
至二浮島原一而暫休息。
虚空寛海望消レ魂　浮世中之浮島原
好念吾生何所レ似　舟無レ楫矣草無レ根
入二豆之三島一而一宿。盥嗽而引二歩於神前一。
三島廟前無二客多一　山鶏上レ樹共賡レ歌
蕭然恰似レ離二塵世一　雖二丈瀛莱一又不レ過
又。
黙禱尽レ誠傾レ首辰　徳馨三島大明神
願分二安否一諭レ吾去　暗擲二金銭一卜二遠人一
卜兆得レ吉而帰。万歳万歳。
十八日日和好。戴レ星而出。踏レ月而行。至二山上一而暫休息。
筥根之頂有二湖清一　旅客洗レ心忘二日傾一
若論二山水一真山水　誰上二屏風一伝二帝城一
往年題曰、筥根高聳若レ登レ天、馬倦人疲共不レ前、誰伝二唐賢一入レ詩去、山頭水色薄籠レ烟。吁老矣。詩材亦黄楊木。影面背面、茂(43)矣綽矣。(44) 山間七八里、不レ及二相之小田原一、一里余而儐従亦飢蹇。中有二一奴之疾走而不レ見。有レ間淡飯一器冷汁一壺、雑レ蓼而来。笑成二狗彘之勇一者幾時。(46) 将謂無婁亭豆粥、滹沱河麦飯。(47) 入二小田原一而一宿。郵亭有二二女一、異二妍醜一。醜者貴、而妍者賤。楊朱過レ宋、(48) 東之二逆旅一。有レ妾二人、悪者貴、而美者賤。楊子問レ故。対曰美者自美、吾不レ知二其美一、悪者自悪、吾不レ知二其悪一。楊子曰、弟子記レ之。行レ賢而去二自賢一之行一、安往而不レ愛哉。予念レ此在レ茲。予密近二家奴一以問レ之、妍者自妍而奢、醜者自

醜而倹乎。曰否、妍者倹、而醜者奢。曰何以貴レ之乎。曰醜者富家女、而載二青銭数万一来也。予笑曰、僮僕記レ之、得レ銭而借レ人、安往而不レ用哉。古人有レ言、有レ財之訟、如二石投レ水、乏者之訴、似二水投レ石。唐人復言、無レ翼而飛、無レ足而走、解二厳毅之顔一、開二難発之口一。凡今人唯銭而已。

十九日日和好。江戸在レ近。宣也千里之行、始二於足下一。入二戸塚一而一宿。

廿五又日和好。踏二武之地一、而過二帷之里一。馬上顧レ後、士峰雪白。

童謡曰、帷雪消不レ為。枉作二古事一、而説二今事一。

称レ帷里号夏尤奇　　艸色映成二藍染帷一

士峰影落吟鞍上　　惟雪歟其消不レ為

亭午入二江戸一、而問二故人家一。故人出而引二予於席上一、温飯煖羹、鯽鱠鶉炙、平城古酒、菟道新茶、為レ予尽レ美。酔而寝。黎明夢断。官門民戸、易面軌制。

漁客未レ聞寒　釣レ恨　　農夫何識餓耕レ愁

太平天下止レ戈久　　多少英雄仰二武州一

廿二日依二伊州太守藤堂主之高招一、而移二居於大家之側一。

俶装已成之日、有二人之寄レ硯而求レ銘。忽々不レ肯。六月八日、小文固封、付二之レ洛人一。

硯本穿レ石　破レ竹為レ箱　若画二斯上一　石竹正当

一日之二角田川一而逍遥。

向二角田川一立少時　　幾回渡守操レ舟之

胡為都鳥誤レ名去　　一笑非レ吾亦若レ斯

見二梅若丸塚一。

慈母慕レ蹤啼出レ都　　惜哉年少倦云徂

塚頭柳朽無二名朽一　　縦角田川水到レ枯

七夕。

庭上設レ莚連二菓瓜一　　笙歌戸々又家々

今宵点レ燭月開帳　　昨夜翻レ河雨洗車

中秋之夕、天暗無レ月。

自レ出二都門一憶二仲秋一　　武州分レ野可二吟遊一

狂雲今夕妬二佳月一　　一枕三盃未レ解レ愁

茅屋之留守、大遺子、題二仲秋一以投レ予云、月満二京城一数二兎毫一、吟遊定棹二武江涛一、憶飛二明鏡一得二相対一、我亦与レ君折二大刀一。

不審今夜之月、万里不レ同二陰晴一。此地異二于洛一、初夜天暗、而無レ月。後夜大雨。他日次二前韻一答レ之。

伝聞京国数二秋毫一　　此地中秋雨起レ涛

清水寺辺宣レ倒レ槌　　隅田川上不レ容レ刀

村々酒子寄レ詩云、東関雖三遠隔二山川一、心之日々対二其面一、帰程投レ宿入レ詩来、士峰添レ雪月清見、又次二前韻一。

無レ果武蔵野野原　　有レ涯角田川川面

何夕措二枕洛山安一　　一輪明月酔臥見

重陽。

独在二異郷一為二異客一　　毎レ逢二佳節一倍思レ親

古似レ今耶今似レ古

十日菊。

節後[60]今朝色更佳
看麼夜半負レ山走

十三夜。

九月猶佳十三夜
中秋一夜何為レ足

晦日。

九旬秋迫已黄昏
奴隷勧レ帰頻罵レ我

十月月旦。

世土還成二陽月一来
山頭欲レ雪雲寒意

十月之望、天気快晴。与二六七人一、入二対州刺史宗氏家一、某山某水、最得二其所一。若有二知仁之人一、豈其可レ不レ楽レ之乎。泛レ舟皆酔。月白風清。[63]就レ中故人保田氏、謂レ予曰、此景盍レ入レ詩。沈吟移レ刻。時有二孤鶴之飛鳴而来一、卒爾得焉。

十月望[64]　風景鮮　風清吹二水面一　月白照二庭前一　剰有二孤鶴掠レ舟過一
憶教三我居二赤壁辺一

故人出レ衆曰　惟肖、時日気景易レ地則然。蘇仙子赤壁遊、全在二于茲一。探レ詩而未レ得、孤鶴忽飛鳴。詩有二神助一、詩有二神助一。

十一月九日、一少年出二扇子一柄一曰、作レ詩誌レ之。詩句未レ成、少年

暗吟二此句一識二其人一

三杯軟[61]飽思無レ邪
是折残枝非二昨花一

吟笻曳レ月不二途窮一

菊後楓前月正中[62]

洛北東関隔二幾村一

明朝以降雪乾坤

子前戌後僉陰哉
自起開レ爐撥二白灰一

払レ袖而去、追レ跡以贈焉。

洒落天然世所レ希　少年叢裡[65]独振レ威
而今始識花言去　唯恨無レ風別処飛

同時豆州走湯山、賢懿定蔵法印、出二扇子一曰、又誌レ之。傍人失笑曰、於戯法印之於二少年一、加以不肖、愛レ之称レ好。及二三五二八一、[67]則為レ過。冀以レ詩正レ之。予亦失笑而走レ筆。

年少何時為二最奇一　大刀横得薄生レ髭
唯随レ所レ好不二分別一　二十無レ過乳臭児

法印誦而不レ頷、東風吹二馬耳一。

二十九日冬至。

武州京国隔二遥岑一　世網容レ吾思深沈
忽遇二一陽来復日一　葭灰万里動[68]二帰心一

十二月十一日、雪自レ朝至レ暮、満レ地尺余。

一朝題レ雪欲レ揮レ毫　手似二薑芽[69]一寒作レ労
何及春秋花赤葉　但愁酒価更増高

十六日立春。

臘底[70]迎レ春心太奇　土牛生菜作レ当為
忽看梅暦繙二深雪一　温レ故知レ新可レ謂レ之

除夜。

臘云尽矣身云老　夜已闌兮物已移
詩味全嘗二彼糟粕一　嚼レ牙[72]巻返一年詩
祭不レ以二酒脯一、[73]自獻[74]酬而酔臥。

寛永十七年、正月吉旦、随レ例詩毫

人仰二武州一嚢二厥弓一　今朝薦レ歳物興レ功

洛陽風色我何慕　礼葉楽花春自レ東

七日。

人家既レ醉賀二人日一[75]　武士彰レ名叫二武州一

武州風暖菜生甲　満埜雪融多二馬牛一

庭上有レ梅。曰二孔明梅一[76]。其木横而臥者二丈。其枝直而立者一八。其花紅而濃。其香遠而清。

窓前択レ地好栽レ梅　見則皆言安在哉

比二木臥龍一枝八陣[77]　一花著レ甲作二花魁一

二月中旬、与二三四人一、負レ喧而分二武蔵埜一[78]。

武州好以レ位二東方一　早迎二斯春一日載陽

尋レ花途遠入間郡[79]　爰亦聞二三吉野郷一

佐久間氏大人、中二城之西北一里余一[80]、而構二一山里一。二月之末、以二暇日一、招二予於山里一。山里也、山高谷深、花咲鳥啼、松門草堂、茶園炭竈、木仏石仏、晨鐘暮鐘、屋上茅穿、池辺橋危。分行有二村路在一。成二町畦一者縦横、売酒楼束二竹葉一[81]、煎二山川一折脚鐺。[82]榾柮爐[83]臥二炉辺一、布嚢破洩二菽麦一[84]。門々斜掛縄簾、鋪陳不レ足稲莚。小田打返、漑レ水、農夫醉叫二豊年一。如旃山家之風俗、象二其自然一者、輙非二人力之所一レ及。数奇数奇。有二佳人八木氏一、竊問二予志一。緘レ口多時。

多景忘レ帰立二路傍一　山容水色離二家郷一

意馬心猿未[86]レ易レ防

縦然教三我住二斯地一

三月晦日。

風光九十去何之　身在二東関万里涯一

愧被二百花撩乱一笑　長安遊子誤二帰期一[87]

四月二日始聞レ鵑。[88]

不レ図今日此聞レ鵑　仕路官門中隔レ年

無縄自縛君如レ解　帰去声高過二我前一[89]

一日一孺子[90]来曰、家二于此一、狐二于家一、雖レ然未レ見二其妖一。前三日以来、夜々奔走、而荐驚レ人、小女児之輩、畏懼而夜不レ如レ厠。乞裁レ詩而禁二厭レ之一。曰未レ学禁二厭狐一之詩上、強乞枉裁。

狐々何事、夜々引伸、庭中設食、屋下蔵レ身、行レ妖則受二児怨一、悔レ非不レ遭二天嗔一、汝性穴居無レ近レ人

後有二五日一、而孺子携二一簟醪一[91]来曰、以レ詩掛レ壁、奇哉、狐全不レ出。予胡盧[92]曰、其然、不レ如二廃レ学而作一レ巫也。

五月上旬、諸侯帰レ邑。太守之不予[93]、期年而自如。各禱二爾之於伊勢賀茂及諸社一。如レ予亦若徒。

多病平生徳不レ隣　松栄二庭上一緑尤新

良将惟天為二国命一　早降二甘露一寿二斯民一

六月中旬、炎熱之日、定蔵法印[97]、撚二起素紈一柄一来云、作二好詩一以誌レ之。

以加不肖楽多哉　汝[99]似レ待二花方欲レ開

利口尤レ人難二媟近一　好過二二十一作二輿墓一[100]

不二是好詩一乎。法印含レ笑曰、諾々、有二温柔敦厚之気一。可レ言二好詩一也。

往日失咲之人、幸而同レ席、顰レ眉曰、莫邪為レ鈍、鉛刀為レ銛。予為レ之以レ誠開示者歟。

優劣何人定得佳　欲レ飛花与二欲レ開一花

愛憎全在二此心動一　李石楽弓非二虎蛇一

二人共不レ為レ足。

有下人之出二浮屠一、而悔二昨非一者、坐中于席末上、起曰腐儒腐儒、未レ知二天地之大一乎。何為其不レ言二於君子好述一也。予叩レ頭曰、某失利、不レ覚而退レ身三歩。

二十一日立秋。

夏日迎レ秋秋自レ今　掌中握レ月立二槐陰一

乾坤未レ削二秦苛一処　一片西風漢祖心

謝二人之恵一瓜。

遠寄二甘瓜一問二老身一　瓊漿玉色此相同

歯牙皆動我何齔　笑学二国君一無二給巾一

七夕。

雲流銀浦尚留レ月　秋嫩金風未レ入レ閨

物報二佳期一点不レ誤　伯労東翥燕児西

一日佐久間氏大人、寄二一画軸一曰、題二一詩一而繫二一図一也。予取以開レ巻。丹青之妙手、鳴レ世者群集、而茲兼二文質一、韋偃樹花香鳥囀。郭熙山雲飛水動。剰詠二和歌一者、皆貴人高家、及長者碩学、賦以二唐詩一。薫蕕夫不レ同レ器。吾儕何可レ同レ列。函封而返レ之。有レ人、異日齎来曰、子之言亦然也。雖レ然、看看至レ末、有二忠美酒大黒布袋福禄寿四睡之図一、是法外狂筆也。題レ之又法外、而不レ拘二于事一、題レ之。且雖レ承レ教顔厚忸怩、曲順二人情一耳。

四睡熟、忘二人間一、斛末無二足踏一、漁竿不二手扳一、破嚢能入二虚空一

擲、頭上看来独戴レ山。

中秋雲雨至レ朝。

去歳今年天一般　中秋蔵レ月桂花寒

籌燈燃レ夢夢方破　杯酒掃レ愁愁尚残

楼上築レ山雲若レ涌　空□吼レ浪雨無レ乾

天公何似二人心客一　又是今宵為二此難一

又。

檐垂二瀑布一点無レ晴　人叫二中秋一失二月清一

縦有二微陰一閣二斯雨一　窺レ窓不レ寝到二天明一

九日。

携レ榼登レ高憶二故郷一　偶然此送二両重陽一

秋風吹レ客転添レ酔　活計方知落帽郎

十日。

節去今朝我亦之　故人牽レ袂屢移レ時

臨レ別分レ身尤可レ好　羨看菊有二折残枝一

書レ壁而出二大家一。

久在二武陽一忘二洛陽一　主人養レ老徳殷昌

鵬程一歩倦レ飛鳥　　憶不レ帰レ郷卻去レ郷

原本伝写紕繆不少見者察諸

元文五丁己晩冬十九日写畢

亡羊子東遊記　終

題亡羊子東遊記后

亡羊子何人斯。莫傲詼諧於東方朔。而遊戯墨場者耶、凡以狂誹名于世者不少。在于緇林則前有狂雲子、後有南浦老、是皆禅林風顛漢也。近世有僧水哉、以狂吟為已任、旦□大言曰、吾狂詩也。戯文也。不啻心猿意馬之狂而已。字狂格狂也而。是我所以別立一家也。在乎儒林例、未聞其人。亡羊子蓋其人乎。使人迷多岐。可謂狂吟作我手矣。余読而捧腹絶倒者、数百回。嗟乎匠心利口、於筆頭、得自由三昧人哉。漫手写之、笑而書巻尾云。

岩

元文丁巳晩冬東武僧普照　山

秉筆於霞谷偏室

注

(1) 上野洋三氏の以下の一連の翻刻がそれにあたる。「三宅亡羊の遺書」(『文学』二〇〇二年一・二月号　岩波書店)、「三宅亡羊の『履歴』」(『雅俗』第九号二〇〇二年　雅俗の会編)、「三宅亡羊の『遺品目録』」(『和比』二〇〇二年四月不審庵文庫)。また『大覚寺文書』中の数点の書簡や、亡羊の唯一の編著とされる『小子夜話』(東北大学附属図書館狩野文庫蔵)も紹介された。これらについては白岩顕成氏「藤村庸軒をめぐる人々(一)三宅亡羊」(『教育諸学研究第十六巻』平成十四年五月　神戸女子大学文学部教育学科)を参照。

(2) ただし三宅家遠孫の御尊蔵の品には、亡羊自筆の詩懐紙や肖像画など、貴重な未紹介資料がなお残されている。

(3) 同書の本文は若い弟子達による寄り合い書きかと判断される。ただ表紙の外題は亡羊の筆跡であるから、校閲を得た本ではあろう。

(4) 『建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究』(平成一九―二二年度科学研究費補助金　基盤研究B　研究成果報告書　平成二三年三月)

(5) 三宅寄斎が「亡羊」の号を用い始める時期については、寛永十九年以降など諸説があったが、寛永十一年の小堀遠州の「浄知老宛書簡」にはすでに「亡羊」の名が見られ、また寛永十三年の『小堀新介正次三十三回忌法要連書』において「南海釣徒亡羊子」と自称している。

(6) 逢春不遊楽…『白氏後集』「酒に対す五首」「蝸牛角上争何事／石光中寄此身／随富随貧且歓楽／不開口笑是痴人」をもとにするか。

(7) 紫陌…　都の郊外の道。

(8) 浮生…はかない人生。

(9) 俶装…旅仕度。

(10) 志之所之如之…毛詩の大序「詩は志の之く所」。

(11) 借一枝…亡羊の遠孫、山上氏所蔵の、慶安二年の亡羊肖像画には、自賛の下に「借一枝」の朱印が認められる。

(12) 瘦藤破笠…細い杖と破れ笠。

(13) 滋賀花園…大津にあった天智天皇の住まい。

(14) 布衣…無官の人。亡羊自身。
(15) 日本紀局…紫式部の『源氏物語』。
(16) 仰之弥高鑽之弥高…『論語』子罕篇「顔淵喟然嘆。仰之弥高。鑽之弥高」。
(17) 箕畢…いずれも二十八宿のうち。月と合して箕星は風、畢星は雨をもたらす。
(18) 千面琵琶、潯陽の月…白氏文集「琵琶行」の一節による。
(19) 羸驂…痩せ馬。
(20) 昔在日本武尊…『日本書紀』巻第七、「景行天皇四十年是歳」の項。
(21) 沈湎…酒に溺れること。
(22) 磨針寝物語…近江と美濃の県境あたり。「磨針」は斧を磨り針を作る老婆に弘法大師が出会った伝承を持つ地。「寝物語」は義経の東国落ちを、家臣江田源蔵の寝物語を隣家で静御前が聞き、再開を果たしたという地。
(23) 唐俘一百余之裔…『日本書紀』斎明天皇六年冬十月「百済佐平鬼室福信、遣佐平貴智等、来献唐俘一百余人。今美濃国不破・片県、二郡唐人等也。」
(24) 荒得板庇…「人住まぬ 不破の関屋の 板庇 あれにし後は ただ秋の風」(藤原良経)。
(25) 寒毛卓立…身の毛がよだつ。『碧巌録』二頌「一死更不再還／覚寒毛卓立麽」。
(26) 趙盾…春秋時代の晋の政治家。君主を殺害したとされる。
(27) 傳説…殷時代の大臣。刑人と道普請に携わっていたところ、霊夢を見た高宗に見出され、高官に抜擢される。
(28) 森…ながあめ。
(29) 八橋之蜘蛛手…「水行く川の蜘蛛手なれば」(謡曲「杜若」)。
(30) 不求得仁…『史記』「伯夷列伝」。孔子が伯夷、叔斎を評し、「求仁得仁」と語ったことによる。
(31) 郵亭…旅宿。
(32) 浜松音…狂言「棒縛」の「浜松の音はざざざ」の一節が流行歌謡「ざざんざ節」として慶長頃盛行。
(33) 西行…有名な西行の歌「年長けて また越えなむと思いきや 命なりけり 小夜の中山」を指す。
(34) 大難大難…禅の公案の常套句か。
(35) 無定河…中国華北地方の大河、永定河の異名。水路が頻繁に変わることからこの名があった。
(36) 乗涼愧…『碧巌録』七十四本則「熱ければ則ち涼に乗じ」。
(37) 瀬戸染飯、宇都山十団子…いずれも東海道の名物。染飯は米を梔子で黄色く染めたもの。十団子は小堀遠州の『辛酉紀行』にも記される、小さな白い団子。
(38) 至頂而有…以下「名富士者取郡名也」までの一節は『本朝文粋』巻第十二、都良香『富士山記』による。
(39) 十年前…寛永六年四月二十日、江戸に下向した折のことか(『履歴』)。
(40) 吸尽西江水…禅語「一口吸盡西江水」。『碧巌録』「第四十二則 評唱」。
(41) 丈瀛莱…「方丈」「瀛州」「蓬莱」は、「壺梁」と合わせ神仙思想の四仙島。理想の境地。
(42) 暗擲金銭卜遠人…『三体詩』巻一「于鵠 江南意」賽銭を投げて思う人の安否を占う。
(43) 影面背面…影面は山の日の当たる面、背面はその反対側。山陽と山陰。
(44) 茂矣綽矣…『日本書紀』巻第十四、雄略天皇七年「天下麗人、莫若吾婦。茂矣綽矣、諸好備矣」。
(45) 儻従…従者。
(46) 狗彘之勇…犬や豚のような者の勇気。孫子がいう勇の四段階の最下位。
(47) 無婁亭豆粥、滹陀河麥飯…『後漢書 馮異伝』の故事。後漢の光帝が若年のころの話。
(48) 楊朱過宋…この話の原型は『荘子 外篇』「山木第二十」、また『列子』「黄帝第

二」にある。

(49) 有財訟…聖徳太子『十七条憲法』の第五条。

(50) 無翼飛…晋の魯褒の『銭神論』による。この一説は『蒙求』一二七項目「魯褒銭神　崔列銅臭」で親しまれたか。

(51) 千里之行始於足下…『老子』六四。

(52) 易面軌制…亡羊が先に訪れた寛永六年から十六年までの間に、江戸は何度か大火に見舞われた。

(53) 梅若丸塚…謡曲「隅田川」で知られるこの塚は木母寺の境内にあり、すでに江戸の名所であった。

(54) 雨洗車…七夕の一日前に降る雨。

(55) 大遣子…亡羊の後継となった三宅道乙。

(56) 折大刀…『集千家註点杜工部集　巻之十二』「八月十五夜月　二首」、「満目飛明鏡／帰心折大刀／転蓬行地遠／攀桂仰天高／水路疑霜雪／林棲見羽毛／此時瞻白兎／直欲数秋毫」を踏まえるか。

(57) 初夜・後夜…初夜は午後八時、後夜は午前四時。

(58) 榼…酒樽。

(59) 独在異郷為異客…『三体詩』所収の王維の詩「九日懐山東兄弟」「独在異郷為異客」。

(60) 節後…重陽の翌日。

(61) 三杯の軟飽…酒を一杯やること。

(62) 菊後楓前…重陽の節句と紅葉の前に位置することをいうか。

(63) 月白風清…蘇東坡『後赤壁賦』。

(64) 十月望…以下の文章は蘇東坡「後赤壁賦」から。

(65) 叢裡…僧の集まるところ。寺院。

(66) 豆州走湯山賢懿定蔵法印…伝未詳。走湯山は源氏ゆかりの伊豆山神社の別当寺院、義真言宗の般若院がある。

(67) 三五二八…十五・六歳の少年。ちなみにこの年江戸彦根藩邸に勤めていた元政は十七歳。

(68) 葭灰…葭灰による気候の占い。冬至になると灰が舞い上がるという（「後漢書・律暦志」）。杜子美の冬至の詩に「天時人事日相催　冬至陽生春又来　刺綉五紋添弱線　吹葭六管動飛灰…」等とあり。

(69) 薑芽…はじかみ（しょうが）の芽。

(70) 臘底…師走の末。

(71) 土牛…『寒山詩』「土牛石田を耕す」。

(72) 噛牙…くやしさに歯噛みする。

(73) 酒脯…酒と干し肉。論語「郷党第十　八」。

(74) 献酬…酒を酌み交わすこと。

(75) 人日…五節句の一。一月七日、人の日として人に刑罰を施さないとする。また羹を食す。

(76) 孔明梅…臥龍梅とも。未だ雲雨を得ないため、天に帰せず地に臥す龍を、天子を会うことなく野に隠れていた諸葛孔明に喩える。家康が今川の人質として暮らした清見寺の庭にも臥龍梅があり、雌伏の後、天下　人となった家康に譬えられる。

(77) 枝八陣…「八陣」は諸葛孔明の考案した布陣。

(78) 負暄…日向に出て日に当たること。貧しい者が貧しさのうちに楽しみを見出すこと（「列子　楊朱」）。

(79) 入間郡…入間の三芳野は、伊勢物語第十段「たのむの雁」の舞台。

(80) 城之西北一里余…佐久間実勝の別業は現在の大久保のあたりにあり、鷹狩りのあと、しばしば将軍家光の御成りがあった。

(81) 竹葉…酒。

(82) 折脚鐺…脚の折れた、酒を温める鍋。役に立たない物の意。「大燈国師遺戒」にも見られる。「折脚鐺」は江月宗玩の使用印。佐久間実勝と宗玩との親密な関係は、門脇むつみ氏著『寛永文化の肖像画』（勉誠出版　二〇〇二年）に詳しい。また『欠伸稿』には亡羊の漢詩に和した宗玩の詩が収録される。

(83) 榾柮爐…ほだ。焚き付け。

(84) 菽麥…豆と麦。「不能辨菽麥」（『春秋左氏伝』）は愚者のたとえ。

(85) 縄簾…茶道具の水指の銘か。

(86) 意馬心猿…煩悩や情欲に捕らわれて心が落ち着かないこと。

(87) 長安遊子…『聯珠詩格』六巻、「閨怨　葉苔磯」。

(88) 鵑…ほととぎす。

(89) 帰去…前の「無縄自縛」とあわせ、陶淵明の「帰去来辞」を踏まえるか。

(90) 孺子…幼い子ども、小僧。

(91) 竪醪…濁り酒の入った竹か。

(92) 胡蘆…げらげら笑うこと。

(93) 太守不予…ここでは家光の体調不良を指すか。

(94) 期年…満一年。

(95) 自如…もとのままになる。

(96) 甘露…天子の徳が高いと天から降るという甘い液体。

(97) 定蔵法印…寛永十六年十一月九日の項に登場した伝未詳の人物。

(98) 素紈…しらぎぬの張られた扇。

(99) 汝…原文は「娄」だが、文意から「汝」の誤りか。

(100) 輿基…召使。

(101) 莫邪為鈍鉛刀為銛…「莫邪」は呉の刀工干将が呉王の命で作った名刀。妻の髪を炉に入れて完成したことから妻の名を命名した（『呉越春秋』闔閭内伝）。名刀を鈍いとし、なまくらな刀を鋭いと誤った評価をすること。世評はあてにならないこと。

(102) 浮屠…僧。

(103) 君子好逑…『詩経』関雎「関関雎鳩　在河之洲　窈窕淑女　君逑」。

(104) 乾坤未削…秦の滅亡後、項羽と劉邦が鴻溝を堺に和平を結んだこと。

(105) 一片西風漢祖心…鴻溝の西を手に入れた劉邦。

(106) 齕…齧でかじる。

(107) 絡…布。

(108) 金風…秋風。

(109) 文質…外見と実質。

(110) 韋偃…中唐の画家。

(111) 郭熙…北宋の画家。

(112) 薫蕕…君子と小人は一緒に扱うべきではない。（『孔子家語』）。

(113) 斛…枡。計量の単位。ここでは大黒天の足下に踏まれる米俵を指すか。

(114) 漁竿…釣竿。恵美酒の持ち物。

(115) 破囊…布袋の持つ袋。

(116) 頭上看来…福禄寿に常に添う鶴。

(117) 檐垂瀑布…軒から豪雨が滴るさま。

(118) 天明…明け方。

(119) 活計…たつき。

(120) 落帽郎…『蒙求』の標題にある「孟嘉落帽」の故事。龍山での重陽の酒宴で強風に帽子を飛ばされた孟嘉は、これを嘲笑う詩に対し、機知をもって平然と応酬したという。

(121) 殷昌…繁栄すること。

(122) 鵬程…遠大な道のり。